



# あじえんだ

2024.10  
第53号

- 流域治水と多自然川づくり
- 清流に咲く可憐な梅花藻 バイカモ
- 相模川河畔林育成プロジェクト
- PFAS 勉強会
- 茅ヶ崎・寒川町浜降祭





# 夏だ！川遊びだ！

## ～安全に楽しく遊ぶために～

### 水遊びの極意は安全管理と危機管理にアリ！

●(株) BiotopGuild 代表取締役 三森 典彰

自然で遊ぶなら水辺に限らずある程度の危険と隣り合わせであることを忘れてはいけません。

特に僕のような自然体験や環境教育を生業とする者にとって、その対象の価値を多くの方々に伝えていくために安全に楽しんでいただくことは必須です。



PFDをつけて水生動物採取

今回は初心者や水辺遊びに慣れていない方が水辺で遊んだり、自然観察する場合の留意点をいくつかご紹介します。

- ①安全なポイントで遊ぶ
- ②より良い体調で遊ぶ
- ③より良い体制で遊ぶ
- ④万全の装備で遊ぶ

①の安全なポイントですが、ここには書き切れません(汗)まず第一に立ち入り禁止の場所や人目の少ない場所、急深な場所、水底が滑りやすかったりサラサラで足を取られやすい砂や砂利の底の場所、流れの速い場所、そして水温がとても低い場所や条件は避けると良いと思います。

① ②は体調管理です。BBQ 中にお酒を飲んでいた

方が流されたというニュースもありましたが、飲酒後はもちろん、寝不足や長距離移動後、準備運動なしでの水遊びは危険を伴うことが多くなります。

③は要するに「一人で人目に付かないところで遊ばない、遊ばせない」ということです。また同行者が流されたり溺れた場合、特別な訓練を受けたり、知識や経験、装備もない方が救助するのは多重事故に繋がる可能性が極めて高いので、すぐに警察や消防に連絡しましょう。この後に紹介しますが、救助を待つ間のリスクを減らすために安全装備を着用して遊ぶことも大切です。

④は安全装備を用意して遊ぶというものです。まずにはなくともライフジャケットや救命胴衣など PFD (パーソナルフローテーションデバイス) を着用するようにしましょう。水の事故のうち多いのはやはり溺れるというものです。浮いたまま、呼吸を確保したまま救助を待つのが最も救助しやすく、生存確率を上げる方法のひとつです。また、肌の防護や防寒のため肌の露出の少ない水遊び用の服装やマリンスーツ等の簡単に脱げない履き物も大切です。

しかし、以上の点に気をつけていても水辺遊びに絶対の安全も万全もありません。

例えば PFD をお子さんに身につけさせても岩場がある流れが速い場所では怪我の危険が高く、ヘルメットも必要となります。

また、僕が講師をしている水辺遊びの安全講習



PFD 着用講習

でもよく見られますが、PFD を適切に着用していなかったり、体に合っていない製品を着用していたり、着用慣れていなかったり、必要以上に恐れて緊張していると PFD を着用していても顔が水



に浸かり溺れてしまうことがあります。反対に慣れすぎて必要な恐れや緊張感を失っても事故は起きやすくなります。

一番大切なのは常に危険を意識して行動することです。安全を確保するための処し方を安全管理といいますが、万が一にも危機に面したときにどう考え行動するか?というのが危機管理です。

特にお子さんと水辺で遊ぶ際には大人が先回りして様々な状況を想定しておく必要があります。

危険があるからと水辺遊びを禁じても子どもは大人の目を盗んで遊んでしまうかもしれませんし、水辺遊びから得られる体験や知識、喜びはかけがえないものだと思っています。

是非安全と危険の双方から目を背けず、悲しい事

故が起きない楽しく得るものの多い水辺遊び、自然観察をしてもらいたいと願っていますし、僕は僕の手が届く範囲でその実現に向けた努力を続けていきたいと思っています。



スローロープ講習

## 川遊びを通じて真の教育を考える

報告者 ● 白鳥 淳子

7月14日相模川さがみ地域協議会が相模川中流域で水ガキ養成講座を開催し、40名ほどの親子が集まった。

講師は主催者である地域協議会の代表 岡田一慶氏。長年、日本の川だけでなく、カナダの川もカヌーで下っている凄腕だ。この岡田氏の指導が独自のスタイルだ。



相模川さがみ地域協議会 / 岡田氏

イベント開始の準備から片づけまで参加者に手伝ってもらい、参加者参加型の講座だった。

また、カヌーの漕ぎ方や生き物の採り方なども一切説明はしない。唯一参加者全体に伝えたのは、川の流れが急に変わっている場所まで岡田氏が行き、「ここから先は危ないから行かないください」と一つだけ説明した。

あとは、参加者が思う存分自由に動き回り、自分たちで考えながらカヌーも生き物観察も楽しんだ。参加者は初心者が半数くらい

だが、周りを見ながら見よう見真似でやっている人や自分の感覚でやっている人、経験者が教えてくれる人など様々なやり方で皆あつという間に上達していた。

最初怖がっていた子どもたちも、最後は楽しそうにカヌーに乗ったり、生き物を探していた。その間も、岡田氏は特に説明することはせずに川の流れが変わる地点で我々参加者をずっと見守りながら立っていた。

岡田氏は、終わってから「雰囲気がよくて、楽しい時間だった」と言っていた。この雰囲気は参加者が作ってくれたものではあるが、岡田氏の指導スタイルが作り上げたものでもないと私は感じた。

一人一人が自由に、そして自分たちで考えながら遊ぶ。この岡田氏の指導スタイルは、真の教育そのものに通じるのではと私自身、多くの刺激を受けた。



水ガキ養成講座の様子

# 流域治水と 多自然川づくり

2024年8月7日

●お話し：萱場祐一（名古屋工業大学教授）

●聞き手：日向治子（市民会員）

11月30日開催予定の流域シンポジウム「命と暮らしを守れるか 新たな水害対策 Part2～支流から考える流域治水～」に先立ち、萱場先生からお話を伺いました。



萱場祐一教授

## 今までの治水と、これからの流域治水の違いは？

私たちが流域治水という言葉聞いたのは3年前、相模川流域治水プロジェクトの策定の時だと思いますが、上流域とくに山梨県側の取り組みは「河道拡幅」しか示されていないのです。これまでの治水で為されてきたこと、そしてこれからの流域治水は何を目指してゆけば良いのか。その辺りを教えていただきたいと思っています。

**萱場** 2020年に国交省が発表した「あらゆる関係者により流域全体で行う流域治水への転換」の3つの柱として①氾濫を防ぐための対策（ハザード対応）、②被害対象を減少させるための対策（曝露対応）、③被害の軽減・早期復旧・復興のための対策（脆弱性対応）があります。ハザード対応には、集水域では対策として「浸みこませる・貯める」があり、河川区域では「安全に流す」ために、「河床掘削」が示されています。

しかし、川底を掘り下げると水深が大きくなり流速が上がるのが問題となります。川底を掘ると支川から本川に流れる洪水の伝播速度が早くなり、洪水の波形が変形せずに本川に流れるという問題が生じます。また、速く流すということは、川底が掘られて、護岸の基礎が浸食されて被災するなどの問題が生じます。

中小河川では「速く流さないほうが良い」という議論が過去にされていたのですが、現在の流域治水では「河床掘削」がメニューとなっており、先ほ

ど述べた問題が生じるだけでなく、川底を掘ることにより河川環境にも問題が生じます。「流域治水」の中に多自然川づくりを取り込むことが重要です。

相模川流域治水プロジェクトの資料をみると、「河道拡幅」となっているのでまだ改修方法の方向としては問題ありません。ただ、河幅をひろげるだけではなくて、多自然川づくりをきちんと実践し、洪水波形の変形によるピーク流量の低減と、環境と調和した川をどのように作っていくかが流域治水に求められます。この点を明確に打ち出すこと、また、管理者以外のステークホルダーの方々が「地先だけではなく下流に負荷を掛けずに、環境も豊かになる川づくりになるような流域治水を目指しましょう」と考えることが重要です。

## 多自然川づくりの効果は？

相模川の上流域、山梨県管理の桂川ですが、まだまだ川のまわりに自然が残っている状態です。それを上手く生かしつつ手をいれていくことによって、より効果のある治水が出来る可能性が有るということですね。多自然川づくりは、流域治水にどのように効果があるのでしょうか。

**萱場** 中小河川の流域はほとんどが県管理です。だから、洪水の発生源対策として、流域でどれだけ浸透・貯留させるか。そして、川の中で単純に水を流すのではなくて、「なるべくゆっくり流して洪水波形を潰して下流に流しましょう」というのが、合流先の本川負荷を減らすという点で重要になります。





多自然川づくりによる河川の風景 / 福岡県 板櫃川 (いたびつがわ)

流下能力の増大は河幅拡幅で対応するが、河幅は残地などを取り込んでワンドや樹林帯などを整備して河幅を同じにしないことで、川の環境が多様になるだけではなく、川の中で水が貯留されピーク流量が低減され、洪水到達時間も遅くなります。かつての川は蛇行し、川のまわりに草などもあって10%くらいピーク流量が低減したのではと思います。河川改修によって中小河川の流下能力は上がりますが、低減率が下がるので、支川から本川へより多く流入するようになります。

低減率がどの程度になるか定量的な評価は難しいのですが、単純な川づくりをすると確実に下流への流量は増えるので、このような川づくりは避けるべきです。下流に負荷をかけない川づくりが、多自然川づくりですので、改修するなら環境にも治水にも良い川をどう作るかに知恵を絞る必要があります。

## 市民の関わり方は？

今、山梨県では、相模川の最上流である忍野村の新名庄川流域における「流域治水対策アクションプラン」の策定作業が行われています。上流で、市民が出来る事がたくさんあるだろうと思うのですが、どう関わっていけば良いのでしょうか。

**菅場** 多自然川づくりもそうですが、地元でエンカレッジしてもらうことが大切です。草が生えると管理が大変といったネガティブな意見が地元から出る

と、河川管理者は元気が出ません。なので、地元から応援してもらうことが大切です。その際、環境だけじゃなくて、「速く流すことが下流に悪さをします」ということも認識して頂き、行政に働き掛けてもらうことが大切です。

また、球磨川の例ですが、“2030年までに2030個の雨庭を作りましょう”ってやっています。これは皆さんのお庭でできますし、雨水を浸透させることは治水だけでなく、地下水涵養という点でも重要ですから、このようなムーブメントを梃として、行政に対して働き掛けになるのも手法の一つでしょう。

県レベルで、流域治水をどう進めようとしているかはとても重要です。県はランドマネージャーで、関係する部署を全て持っている。そこに横串を通して、流域治水について議論してもらうことも必要です。

### <お話を聞いて>

桂川・相模川流域協議会は、流域に関わる市町村と県、国の行政のほか、森林組合などの事業者及び市民が連携している団体です。多様なステークホルダーを結ぶ銚(かすがい)となり、多自然川づくりによる流域治水を目指す事で、ネイチャーポジティブ(自然再興)を実現していくことが、当協議会の役割となるのではないかと思います。11月の流域シンポジウムでは、その辺りを掘り下げていきたいと思っています。



# 清流に咲く可憐な梅花藻<sup>②</sup>

報告者 ● 清水 絹代 (市民会員)

梅花藻は忍野村から都留市までの桂川流域の大小の河川や多数有る湧水池等に生息している。今回は、上流部の忍野村から富士吉田市内の河川・湧水池に生息する梅花藻を紹介する。

周辺の山からの水を集めた忍野村内を流れる新名庄川は、途中で忍野八海から湧き出る湧水が流れ込み、水量が豊かでゆったりとした流れの川でやがて桂川に合流する。川底一面に1 m以上に伸びた大きな梅花藻の株が数十 mに渡り点在する。流量が豊かで水深があるので、花は水面には見られず水中で揺らいで咲いている。水底は梅花藻の株の緑に覆われているが、白い可憐な花は水面上で見られないので、地元住民始め多くの観光客もこの貴重な景色に気づく人はほとんどいないと思われる。



新名庄川

忍野八海は池ごとに水温・流量等に違いがあり、梅花藻生息池は涌池(水温12～13℃湧水豊か)・お釜池(13.5℃湧水豊か)・底抜池(14℃)・濁池(10～13℃湧水少ない)・出口池(10～13℃)の5池に見られる。一番小さなお釜池は梅花藻の花が水面一面に見られ、流れ出す水路の幅一杯に長い株が豊かに生息している。他の池は水深が深いので花は水中で開花。また石菖藻との共存が多く見られる。



お釜池梅花藻

富士吉田市内の中央高速道路近くで湧き出た湧水が高速道路をくぐって小さな川になっている。水量豊かで流れも速い小さな支流は、直下で桂川本流に合流する。遙か高い位置からしか観測できないので水温は計れないが、梅花藻の株の揺らぎが観測できる。



富士吉田桂川支流

かつて富士吉田市内には山からの水路や神社脇の水路等に梅花藻の生息が見られた証言があるが、生活雑排水等の影響か今は見られない。また、周辺の開発工事等の影響ともいわれている枯渇した寺の湧水池にもかつては梅花藻が生息していたかも知れない。

次回は西桂町・都留市の梅花藻を紹介する。



## 化学物質と自然

# P F A S について 学びながら、暮らし方を考える

開催日時：2024年3月

オンラインセミナー

講師：原田浩二氏

京都大学大学院

テーマ：「化学物質と自然」

報告者：白鳥淳子（市民会員）

20世紀前半、軍事目的を中心に、世界の科学技術が加速的に発展したと言われている。それだけではなく、企業の営利目的、また私たち人類が便利さという旨味を覚えてしまったがゆえに機能性や効率性、生産性の向上への追及に社会全体に拍車がかかった時代であったのだろうと私は解釈している。この時代の技術革新によって、PFAS（有機フッ素化合物）やプラスチック（高分子化合物）、合成洗剤、合成保存料や合成甘味料などの食品添加物といった多くの物質が開発され、企業はこれらを使って様々な製品や商品の大量生産を可能にし、消費者は大量消費を当たり前にしてきた。

今年3月に京都大学大学院の原田浩二氏をお招きしてPFASについて学ぶオンラインセミナーを開催した。原田氏が冒頭に「PFASは、水だけでなく油もはじく性質をもつ。その便利な性質をもつ物質ゆえに様々な製品に用いられているが、分解されにくいいため、自然界に永久に残ってしまう物質である。」と話された。この時に私は、プラスチックも、合成洗剤も同じだと直感した。

我々はこの便利さを手に入れるために自然を犠牲にしたのだ。これらの物質は自然界には存在しない物質であるため、分解されづらく、人や生物の生体へ取り込まれると有害な影響を引き起こすことが心配されている。私たちの暮らしの中の生活用品のほとんどが製造過程でこれらの物質を使用していると、過言ではないほど、この便利な物質に私たちは依存してしまっている。この便利な物質が継続的に蓄積していき、我々人間の健康だけでなく、土や動植物、地球上の生命の健康へ様々な深刻な被害をもたらしている。また、水や空気の正常な循環を含めた生態系にも影響が及んでいる。そして、ますますこの問題が大きくなっていくのではないかと私は強い危機感をもっている。

この便利さへの代償が自然に降りかかっていると私が感じたのはつい最近、3年前のこと。きっかけは自宅のそばを流れる道保川で子どもと毎週のように

に遊んでいたときに、継続的に泡が流れていることが気にかかったことからだった。自分でネットや本などで泡の正体について調べてみたり、勉強会などに出向いて専門家の方から化学物質について話を聞いた。そのときに化学物質の分解性や毒性について学んだ。すぐに自分が使っていた合成洗剤や合成系のシャンプー、ボディソープなどを止めて石けんに切り換えたところ、長年悩ま

### 原田浩二氏プロフィール



#### 略歴

- 2002年 京都大学薬学部卒業
- 2007年 京都大学博士（社会健康医学）
- 2007年 京都大学大学院医学研究科 助教
- 2009年 同准教授

2002年から京都大学の小泉昭夫教授（現名誉教授）の研究室でPFASの環境調査、バイオモニタリング、化学分析法の開発に携わる。近年、沖縄や東京・多摩地区、大阪など各地のPFAS汚染地域での調査に取り組んでいる。

著書 これわかる PFAS 汚染 暮らしに侵入した「永遠の化学物質」、合同出版、2023

## PFASとは？

(per- and polyfluoroalkyl substances)

- ペル／ポリフルオロアルキル物質  
(少なくとも4700種類以上)
- 人工の有機物 (炭素、水素、酸素など)
- 水素ではなくフッ素で覆われた  
ペルフルオロアルキル鎖Rを持つ  
Rf基:  $CF_3-(CF_2)_n-$
- 耐熱性、耐光性
- PFAS関連物質も最終的に  
安定なPFASになって残留する可能性
- 特に注目されている2物質  
ペルフルオロオクタンスルホン酸 (PFOS)  
ペルフルオロオクタン酸 (PFOA)



れていた手荒れや皮膚の痒みがピタッと嘘のようになくなったのだ。その実体験から、有害な化学物質が自然や人体へ及ぼす影響は間違いなくあると確信した。

さらにゾツとしたのは、原田氏の講演の中で「PFASは胎児への影響が大きく、低出生体重児や免疫力低下の健康被害が海外の知見から分かっている。」というお話だった。一番脆弱な者へ降りかかる影響。これは絶対に止めなければいけない。科学的な知見が足りないのであれば、その知見を

2024年3月開催

京都大学大学院医学研究科 原田浩二氏によるオンライン学習会についての広報



## 水の安全について学ぶ

～ PFAS (有機フッ素化合物) って  
どんなもの?～

現在、全国各地で明らかになっているPFAS汚染。

神奈川県でも相模原市、座間市、秦野市、大和市など、各地域の地下水、井戸水、河川で国の暫定目標値を越える値が検出されており、魚や野菜、他の食品からも検出されています。

海外の動向を見ると、アメリカの一部の州はPFASが全面禁止となり、EUではPFASの全面禁止を検討しているところです。

ところが、日本ではPFASの規制は緩いまま。本当にそれで大丈夫なんでしょうか？

私たちの健康や命に関わることです。国や地方自治体、企業任せにするのではなく、私たち市民もPFASについて知って、考えていく、そんな学習会になればと思います、オンラインにて実施いたします。

主催：桂川・相模川流域協議会

ホームページ：<http://katurasagami.net/>



桂川・相模川流域協議会

これから集めていくべきであり、その知見が集まるまでは、先取りして国や各自治体は予防的な対策をしていくことが脆弱な健康と命を守るために我々が全力を挙げて取り組むべきことと強く思っています。健康に影響が出てからでは遅い。

『暮らしの便利さ』と『脆弱な健康と命』を天秤にかけてときに、真っ先に『脆弱な者の健康と命』を選びたいと私は思った。自分に問いかけた。

さあ、そう思うなら今、自分に出来ることはなんなのか。

①友人や周りにこの問題を伝えていき、お互いに知恵を出し合って少しずつでも改善させていくこと。

②これから先もずっと化学物質について学び続けながら自分の暮らし方を一つ一つ見直していくこと。

この二つを自分ができる範囲で、できることから取り組んでいきたい。



# 相模川河畔林育成プロジェクト



執筆者 ● 森田 雅己 / 日産モータースポーツ&カスタマイズ（株）

当社は1986年に茅ヶ崎市萩園に設立され、茅ヶ崎市萩園に設立され、日産車をベースとした特装車両や福祉車両の企画・開発及び製造を行っています。「相模川河畔林育成プロジェクト」は、創立30周年を機に地域貢献について論議する中で「相模川の河畔林を育てる会」の存在を知り、事務局の村中さんから「ぜひ一緒にやりましょう！」と誘って頂いたことがきっかけになります。



活動場所は会社に隣接する相模川沿いの「平太夫新田」で、茅ヶ崎市の重要自然環境地区に指定されています。そこには絶滅が危惧される動植物が多数生息し、鳥類などの移動空間としても貴重な環境です。私達が目指すのは、その中で生息・生育する動植物が生息可能な「河畔林」を育てることです。2017年から計11回の活動を行い、参加者は毎回約50名で、社員とその家族に加えて協力会社や当社特装車両のお客様にまで少しずつ拡大しています。



2019年

但し、初期には活動の成果を疑う声もありました。毎回、背丈ほどの草むらに入り、外来種を手で抜き、草刈り機や大小の鎌で草を刈り、熊手やほうきで草を運ぶなど、約2時間半かけて見違える程きれいに刈り込みます。その達成感はとても大きいのですが、数ヶ月後にはすっかり元に戻ってしまい、年に数回程度で効果があるのかとても心配になりました。

しかし、「相模川の河畔林を育てる会」の村中さんから、「活動の成果は、50年～100年先の姿を見て欲しい、その単位で見れば草に隠れていた看板が見えるようになったことや、ツルが無くなり樹木の勢いが戻ってきたことは、確実に成果です！」という言葉を受け、この活動の成果の見方を改めて理解すると同時に、活動を継続するには小さな変化でも活動の成果を把握して、参加者で共有することが必要と感じました。



2023年

これを受けて、芽生えた幼木に赤いテープをつけて成長を見えるようにすることで、今ではその幼木達が私たちの背丈を超えるまで育って、この活動の成果・意義を強く感じさせてくれます。最近では、根際ではなく少し高い位置で草を高刈りすることで、ジャコウアゲハの幼虫やカヤネズミも生息が確認されました。

社内での活動報告では、こうした成果に参加する社員へ丁寧に説明することで、時間は掛かるが必ず成果は現れていることを理解して貰っています。今後も50年～100年先の姿を目標に、会社が存続する限り継続してゆきたいと思っています。





# 河川敷や丘陵に見られる植物

●長岡 恂／厚木植物会

## サルナシ (マタタビ科)



「猿が食べる梨のような実だから」が語源のようだが、陽当たりの良い山道を歩いていると林縁に葉軸が赤く染まる葉が目にとまる。雌雄異株または雌雄雑居性のつる植物で落葉性。日本全国に広く分布している。基本的には標高の高い山に自生しているようだが、神奈川県でも丹沢、箱根、などに多い。植栽もされていて里山の畑や平地でも時折見られる。

成長するとつるが3mほどになる。6～7月にかけて白色のかわいらしい花を次々と咲かせる。花弁は5枚で、茎の付け根に密集するように咲くのが特徴。花弁は2～3cmほどで小さい。咲き姿はマタタビの花によく似ている。花後に結実し、鮮やかな黄緑色の実をつける。半分に切るとキウイフルーツのような見た目をしている。

ビタミンC、Eなどの栄養価が高く、タンパク質分解酵素を大量に含み、疲労回復や強壮、整腸、補血作用などの効果があるようだ。

近年アメリカやニュージーランドから品種改良された苗木が輸入されており園芸店で見掛ける。鉢植えもできるようだ。果実はとても甘いので、生食だけでなく果実酒やジャムなどにも加工されている。野生種の果実も見ついたら試食をお勧めする。野生とは思えない美味しさだ。



## ツルウメモドキ (ニシキギ科)



山里の温泉旅館の玄関ホールにツルウメモドキが大きな壺に生けられていたのを思い出す。

2mほどの特大なツルには黄色や橙赤色に色づいた実がたくさん付きホール全体が輝いていた。こんな大株は山野では出会ったことがない。生け花やリースなど、花材として人気がある。

冬の時期には、ツルウメモドキの果実は野鳥の数少ない御馳走となりヒヨドリ、キジバト、メジロ、ツグミなど多くの野鳥が集まる。ヒヨドリの大群が飛来するとまたたくまに食べつくされてしまう。

雌雄別株のつる性落葉樹。葉腋に短い集散花序を出し、雌株では1～3個の花をつける。花は黄緑色で、直径6～8mm。花期は5～6月。11～12月ごろに黄色く熟す。果実は直径7～8mmで、熟すと3つに割れ、橙赤色の仮種皮に包まれた種子が顔をだす。種子は長さ約4mm。葉裏は無毛。

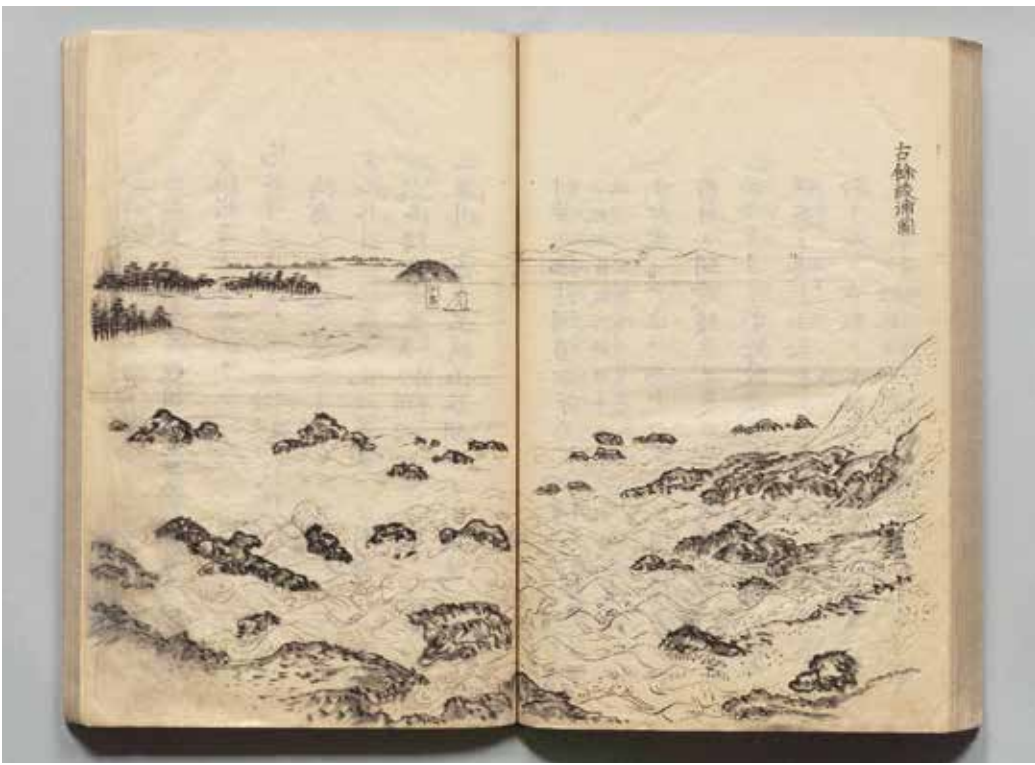
葉裏の脈状に毛があるものをオオツルウメモドキ。脈上に畝状の突起と突起毛があるものをオニツルウメモドキと葉裏で見分けることができる。葉の大きさも両種ともツルウメモドキよりも1～2割は大きい。神奈川県北西部の丹沢、道志山塊に多く分布する。

(神奈川県植物誌 2018)





# 座間の入り海にもコヨロギ



出典：国立公文書館デジタルアーカイブ  
「新編相模国風土記稿 19 古餘綾浦圖」

江戸幕府の地誌方が編纂した『新編相模国風土記稿』は、天保十二年（一八四二）に稿本が完成しています。それ以前に、地方の村から提出した「書き上げ」をもとに、幕府の専門の役人が現地調査をして確かめているので、出来上った『風土記稿』の本文は、かなり正確です。しかし、役人の考証による加筆とみられる記述もあって、ただただ信じることはできない部分もあります。

例えば、現代の相模川の本流に沿った高座郡座間宿村の条には、土人の伝えに、座間郷の地は、往昔は東海道の駅野で、「夷参駅古洵綾里と唱ふ」と、朝廷の正史の一つ『続日本紀』宝龜二年十月己卯の日の太政官の奏を引いています。これに続けて記す「古洵綾」のことは、「大磯辺の地名なれば、里名の説は疑はし」とあったようですが、海辺の村をコヨロギと呼ぶ例は、相模湾一帯にほかにもあり、「座間宿村」が「古洵綾」と呼ばれたという伝えも、その一例に見えます。

かかる『風土記稿』の「洵綾郡」の「海」の項の解説がすぐれているのは、同じ相模国の鎌倉郡にも、腰越村の海岸にある八王

子社の地を、「古田留義」と呼ぶ例があることを注意していることです。その「小動」のことは、貞享二年（一六八五）刊の板本『新編鎌倉志』巻六の「小動」の項に、くわしく誌されています。徳川光圀が延宝二年（一六七四）にみづから鎌倉の各旧跡を歴覧し、家臣たちにまとめさせたとのこと。 「小動」とは、七里ヶ浜を西へ行き、腰越へ入る左の方に海に張り出した離れた岩山があります。山上には八王子の宮があって、山の端に、海辺に指し出した松があり、風波に常に動くので、「こゆるぎの松」というとあります。

座間の町にある「鈴鹿神社」は、明治初年の『皇国地誌』に引く「古伝」に、欽明天皇の時代に、伊勢国の鈴鹿神社の祭の海上渡御のとき、神輿・神宝を積み、舎人が随従したまま西風に漂流、相模国の入海の東岸に漂着しました。今の相模川の地は、南北七里の入海であったとあります。『風土記稿』が座間郷の地を「古洵綾里」というと記すのは、座間の海も、内海七里の静かな入り海であったのでしょう。ヨロギとは、船を寄せるのに良い磯を呼ぶ、相模地方の方言であったかもしれせん。



# コガムシ

●守屋 博文／神奈川昆虫談話会

## ●牙を持つ水生コウチュウ

コガムシは、川岸にできた水たまりや、水田、休耕田などで見られます。同科でより小型のヒメガムシと同所的に確認できますが、数は本種のほうが少なく、「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」では準絶滅危惧というカテゴリーに位置付けられています。ガムシは漢字で「牙虫」と書き、成虫腹面に針のようなトゲが後方に伸び、これを牙(きば)に例えたところから、この名がついたといわれています。

水生コウチュウの呼吸方法は様々です。ゲンゴロウの仲間は、腹部先端を水面に出し、ここから腹部と翅(はね)の間に空気をため込み、この空気を気門からとり込み呼吸しています。ところが、ガムシの仲間は、頭部先端を水面に出し、腹部と翅の間だけでなく、腹面にも空気をため込んでいます。このため、水中での様子を観察すると、白く光る幕を確認することができます。

## ●水面に浮く卵囊

田植えを終えた時期に水田を訪れると、水面にぶかぶか浮く白いかたまりを見つかることがあります。よく見ると、白いかたまりは草の葉や落ち

葉が丸められた中にあり、そこからは細い糸のようなものが上部に突き出ています。

成虫で越冬したコガムシは、この季節になると水域に飛来し、オスとメスが出会い産卵し、このような形の卵囊(らんとう)を形成します。

## ●幼虫は肉食

コガムシ類の成虫は、ほとんどが水草などを食べる植物食ですが、幼虫は貝類や他の水生動物を食べる肉食です。このためあごが大きく発達し獲物を捕らえやすくなっています。大あごでとらえると、消化液を注入し肉を溶かし、それを吸い取ります。成長した幼虫は、初夏には一旦陸に上がり土の中で蛹となり、夏には成虫として羽化し水域に戻ります。水田の耕作工程を巧みに利用した水生昆虫の一種です。



卵囊と孵化した幼虫



成虫

ヒメガムシ後胸腹板のトゲ



幼虫



みしょうたいさん

**御正体山 1682m**

報告者●中村 光義

御正体山は道志と都留の境に位置し、標高は1682m。道志、秋山山塊の最高峰である。都留の谷を隔てて三ヶ峠山と相対しても遜色ない大きな山体であり、登山ルートも東西南北から通じ、バリエーションルートを加えると7つを数える。富士や奥多摩、奥秩父など離れた場所から眺めた時には容易に見いだせる山であるのに、上野原の近辺からは大きさの割には見つけづらい。山頂からの展望は無く、交通の便も悪い。そのためか訪れる登山者も少なく、静かな山である。



都留市郊外からの御正体山の鋸尾根

山名に「御」の字を掲げるのは信仰登山の対象であるに違いない。池の平からの登山道にある上天堂跡は江戸時代に即身仏となられた妙心上人を祀ったものであり私はここにその由来を考えていた。しかし、これは全くの誤りで正しくは古の都から見て日が昇る東方に位置する大きな山として信仰対象になっていたと文献にあった。江戸期をはるかに遡る時代の話である。往時は今と違って信仰厚い多くの人々を迎えていたのだろうか。

この山に最後に登ったのは、池の平からのシキリ尾根コースからのものだった。車で東桂から桂川の支流の鹿留川に沿って池の平に入り、ここから鉄塔の巡視路を辿った。歩きやすい巡視路を外れて踏み跡の薄い尾根に入る箇所は地図で確認。山伏峠からのコースと合流する箇所は踏み跡が錯綜するが、どこを歩いても一般コースと合流できる。しかし、下山にこのコースを使うとなると

状況はまるで異なり難しくなる。ここからゆるく登っていつもと変わらぬ静かな平らかな地に着いた。ここが御正体山の山頂。誰も来ない一人ぼっちの昼の時間を過ごした。

車を置いた池の平までの下山路に行く。このコースは往時の信仰登山のメインコース。抱付き岩と大仰な名の岩場を経て峰宮跡の先で三輪神社からのコースを右に分ける。このコースからの登山回数の方が多いのだが面白みは少ない。左に少しでまた分岐。そのままの尾根伝いは鋸刃コース。鋸刃といわれるだけのアップダウンの激しい尾根で一か所ルートを探す必要がある岩場がある。このコースはある程度の経験を積んでからの挑戦の場だろう。さて今日の私は左に池の平へ往時の信仰の跡を見ながらの明確な山道を下ろう。

御正体山は現在でも奥深い山である。古の昔は登山口の池の平まで達するのにどれだけの日時を費やしたことだろう。漸くたどり着いたこの地から願っていたお山に取りつける。その高揚感はその過程に費やした時間に比例するだろう。そしてたどり着いた山頂での心情を想う。それは現在の過程をできるだけ省略した利便性第一の登山では決して達することのできない精神の高みにあるのだと思う。自然保護などと驕ったものでなく自然を尊び敬う精神に通じる世界の話である。





# 相模川に残された 寒川神社の神輿



報告者 ● 金子 登喜男 (さむかわ観光ガイドクラブ会長)

寒川町観光協会 QR コード

毎年7月海の日（7月17日）の早朝に行われる浜降祭は、湘南地方に本格的な夏の到来を告げる祭典と言われています。昭和53年に「神奈川県無形民俗文化財」に指定され、「かながわのまつり50選」にも挙げられるなど、神奈川県を代表する祭典でもあります。

浜降祭は寒川町・茅ヶ崎市の各社神輿約40基が夜明けとともに南湖の浜（茅ヶ崎市）に参集し、その勇壮ぶりから「暁の祭典」とも呼ばれています。これほどの数の地元神社の神輿が一堂に会する祭典は全国的にも珍しく、地元の人々にも愛され続け約9万人の来場者で浜は埋め尽くされます。五穀豊穡・海上安全と地域の産業発展が祈念されています。

古来から「ハマオリ」とは海辺における「禊（みそぎ）」を意味しています。海水により心身を清め、神霊の更新を図るとともに新たな御神威を授かる神事であると考えられ、古くから伝承されている習俗であります。

浜降祭の起源については、明らかになっていませんが、安永9年（1780）寒川神社の「当社年中祭附并神領石高帳」に「6月15日、浜にて御供と御神酒」という記載が確認できることから、江戸時代中期にはすでに浜において神事が行われていたと推測できます。また明治7年の社務日誌では寒川神社のほか茅ヶ崎市の鶴嶺八幡社など5社で浜降祭を行ったとあり、もともと鶴嶺八幡社は独自で禊神事を行っていたようです。このように浜降祭が始まった説はいくつかありますが、もう1つの説があります。それは江戸時代の天保年間に起こった歴史的事実に基づく説で、天保9年（1838）5月5日の國府祭に参加した寒川神社の神輿が、神事を終えて帰る途中、平塚の馬入の渡し場で地元の氏子の争いに巻き込まれて、ちょうど大雨で増水していた相模川に寒川神社の神輿は転落し流されてしまいました。この時狼藉を働いた16人は打首の刑が科せられました。しかし時の代官の恩情により丁髷（ちょんまげ）を切り落とすことで打首の刑は免れました。平塚の蓮光寺にその時の記録として丁髷塚が残されています。

さて寒川神社は神輿を流失という大変重要な状況であり、急いで湘南海岸一帯の村々に300石の報奨金を付け神輿の捜索を依頼しました。数日後、南湖の浜で地引き網をしていた網元の鈴木孫七が海中に沈んでいた神輿を発見。引き上げて神輿を自宅の裏山にハマゴウを敷いて安置し、寒川神社に急報し無事に神輿が寒川神社に戻ったとされています。この功績により鈴木孫七は寒川神社の御旅所神主に任命され、禊場も孫七の魚場である南湖の浜に移され、毎年寒川神社の神輿が渡御するようになりました。



浜降祭／寒川神社提供



昭和39年浜降祭参集殿前 金子登喜男氏撮影



昭和44年浜降祭参道 金子登喜男氏撮影



浜降祭／寒川神社提供



浜降祭／寒川神社提供



# 定期総会開催

日付：2024年6月16日（日） 場所：サン・エールさがみはら（相模原市）

報告者●山梨県事務局

6月16日、定期総会が開催されました。

まず、2023年度に行われた3つの事業について事業幹事より報告が行われました。

その後、各地域協議会から昨年度の活動状況の報告が行われました。

引き続き行われた議事では、市民部会の市村さ

んが議長に選出され、総会成立（会員数148人・団体、有効数108（出席者17人・団体、委任状91通））の報告の後、昨年度の事業報告及び決算報告、今年度の事業計画及び予算、役員改選についての審議が行われ、原案どおり承認されました。



役員改選

## 事業・活動報告内容



活動報告の様子

### 【石倉カゴによるウナギ等生息調査】

絶滅危惧種（I B）に指定されたニホンウナギの相模川における生息状況を明らかにし、住処を保全するため、石倉カゴを設置した調査を行った様子について、月別捕獲数等の発表を交えて事業報告がありました。

### 【地下水・湧水調査】

地下水・湧水の保全に必要な湧水地点が不明確であるため、湧水の分布状況等の地点調査及び湧水状況調査を行ったことについての報告がありました。

### 【各種オンライン勉強会】

流域シンポジウム開催に向けた「流域治水と森林」や、流域に関係する環境問題をテーマに学識

経験者による講演をオンラインで3回開催し、参加者の意識醸成、課題共有を行ったとの事業報告がありました。

### 【相模川さがみ地域協議会】

カワラノギク保全活動（種まき、お花見、圃場整備）、流域探訪（石老山、陣馬山）、水ガキ養成講座等の活動報告のほか、2023年度からの新たな取り組みである、ウグイの産卵場の造成とツリークライミングの実施状況について報告がありました。

### 【相模川湘南地域協議会】

カワラノギクの保全活動、相模川クリーンキャンペーン、湘南茅ヶ崎海岸マイクロプラスチック調査、身近な水環境調査や川遊びイベントの実施・参加協力等の活動報告がありました。

### 【相模川よこはま地域協議会】

神奈川県海岸線（三浦市浜諸磯～横須賀市久里浜）のプラごみ調査とデータベースづくりや、海底や海岸の清掃等の活動報告がありました。

### 【山梨県での活動紹介】

山梨県で行っている皮むき間伐森林体験や森林環境譲与税の活用事例調査、梅花藻（バイカモ）生息状況調査の活動状況の紹介がありました。



## ●桂川・相模川流域協議会が国土交通大臣から表彰

報告者●桂川・相模川流域協議会事務局

当協議会の長年の流域環境保全の活動が評価され、「令和6年度水資源功績者」の団体表彰として国土交通大臣から表彰されました。

※水資源功績者…水資源の開発、利用、水源の涵養等に長年にわたって尽力されるなど、特に顕著な功績があると認められる個人又は団体が表彰されるもの

受賞理由として、「市民・事業者・行政が連携して、森林体験などの上下流交流事業や、流域環境保全の意識醸成を図るための流域シンポジウム、流域の清掃活動支援や水環境調査など、良好な流域の環境保全に貢献している」ことが挙げられ、1998(平成10)年の設立以来、26年にわたって市民・事業者・行政の協働により、桂川・相模川の流域保全に長年取り組んできたことが評

価されたもので、8月2日(金)、国土交通省のある中央合同庁舎3号館8階特別会議室において表彰式が執り行われ、倉橋市民部会代表幹事が代表して表彰されました。

今後も、「清く豊かに川は流れる」を理想像として、引き続き桂川・相模川の流域保全に取り組み、活動を推進していきますので、皆様の応援・協力をよろしくお願い致します。



### 第30回

## 桂川・相模川流域シンポジウム開催のお知らせ

「命と暮らしを守れるか 新たな水害対策 Part 2 ～支流から考える流域治水～」をオンラインで開催予定です。申し込み等の詳細は協議会 HP をご覧ください。

講演テーマ：支流から考える流域治水～多自然川づくりの新たな役割

講師：萱場祐一氏(名古屋工業大学教授)

日時：2024年11月30日(土) 13時～16時

サテライト会場：山梨県南都留合同庁舎

サン・エールさがみはら

ひらつか市民活動センター



### 入会のご案内

協議会では、クリーンキャンペーンや、上流域と下流域の方々が集う交流事業など、さまざまな活動を通じて桂川・相模川の水環境の保全・再生に努めています。

活動に興味をお持ちの方、いっしょに活動して見たい方のお入会をお待ちしています。

入会に関する手続きや協議会に関するお問い合わせは事務局にご連絡ください。

**あなたのその力が豊かな水環境を創ります。**

原稿  
大募集

本誌に掲載する原稿を募集しています。

採用された作品は、会報誌「あじえんだ113」(当誌)に掲載します。

また、採用された方には粗品を贈呈いたします。

みなさんからのご応募をお待ちしています。

#### 募集要項

- ・テーマ「あなたの好きな流域の風景」
- ・A4・1ページ(800字程度と写真数枚)
- ※応募原稿は自作未発表のものに限ります

#### 応募方法

お名前、ご住所、お電話番号を明記の上、事務局あて郵送又はメール(ft-rinmuk@pref.yamanashi.lg.jp)でお送りください。

表紙写真/撮影場所：浜降祭(寒川神社提供)

本紙に対するご意見・ご感想を下記事務局までお寄せ下さい。

あじえんだ113 No.53(2024.10発行)

発行 桂川・相模川流域協議会 編集 あじえんだ113 編集委員会

桂川・相模川流域協議会  
ホームページアドレス  
<http://katurasagami.net/>



事務局 山梨県林政部富士・東部林務環境事務所 〒402-0054 都留市田原2丁目13-43 TEL.0554-45-7810 FAX.0554-45-7807  
神奈川県環境農政局緑政部水源環境保全課 〒231-8588 横浜市中区日本大通1 TEL.045-210-4358 FAX.045-210-8855



■やまなし森の印刷紙  
この印刷紙には、FSC®  
森林管理認証を取得した  
山梨県有林からの木材が  
使用されています。



ユニバーサルデザイン  
(UD)の考えに基づいた  
見やすいデザインの  
文字を採用しています。